



横浜陶芸友の会だより

第 150 号
平成 24 年
4 月 1 日発行

「第三十三回作品展」の事業報告

事業部 鍋島弘義

会員皆様方のご協力をおもちまして、「第三十三回作品展」も無事、終了することができました。ありがとうございました。

今年度は、地震の影響でしょうか、出展者数が昨年に比べ少なくなりました。

市民ギャラリーの移転計画も新聞に掲載され、交通の便の良い関内で行われるのも、来年度が最後かもしれません。

来年の作品展も、会員皆様方のすばらしい作品が、たくさん出展されることを期待しております。

【事業報告】

会期 平成 24 年 1 月 11 日(水)～16 日(月)
会場 横浜市民ギャラリー 1 階展示場
入場者数 1779 名
出展者数 52 名
養護・特別支援学校 7 校

(聖坂養護・本郷・上菅田・日野中央高等・

中村・北綱島・港南台ひの)

※小・中学校などの出展希望があればお知らせください。

出展数 553 点

(特設コーナー「陶管」と

養護・特別支援学校生徒作品を含む)

懇親会参加者数 22 名

(会場はギャラリーすぐ近くの「津和野」)

当番人数

今年度も、搬入の日に「会場係の仕事説明」と「当番日」のプリントを配布しました。

ご協力ありがとうございました。

会員皆様の「作品展」です。来年度にも、ぜひ、出展された方は会期中に半日でもよろしいのでお手伝いをお願いいたします。

今年度の責任者も含めた当番人数

- 11 日 (7 人) 12 日 (7 人)
- 13 日 (12 人) 14 日 (14 人)
- 15 日 (9 人) 16 日 (13 人)

特設コーナー

○今年度は「陶管」でした。28 名の出展がありました。難しかったのか昨年より少ない参加者でした。

その他

○昨年度から、申し込みを Eメールと封書で行なっています。Eメールで申し込んだ人は 12 人でした。

○出展料は「友の会」への賛助金 です。作品は並べば良いというものではありません。ゆとりを持って展示できるように来年度から基本を 60 cm から始めることを検討しています。



(作品展では退会された友との こんな再会もありました。)

初春や 陶芸展のはなやぎて
陶芸展出て 心地良き四温晴

金子勝壽

『作品説明・質問時間』

今回初めての試みで、会員さんの希望を募り、作り方の説明を、作者に語ってもらおうという企画をいたしました。最終日の 16 日 13 時ごろから会場内作品の前で 20 人ほどが集まり、作者者に熱く語っていただきました。

話し手①・・・今井寮一郎さん

水彩画を二十数年前に習い始めて、その後十数年前に陶芸を始めました。



陶芸をする中で水彩画（水彩画）を陶器に乗せたいと、いろいろ試していました。

水彩画では鉛筆で線描きをし、それに透明絵の具を乗せます。このとき、筆目を残さないのです。

私がたどり着いたのは、鉛筆の代わりに下絵の具鉛筆を、透明水彩絵の具の代わりに透明釉で薄めた下絵の具を使う方法です。下絵の具鉛筆は Hus-10 online で入手できます。下絵の具は顔料を同量以上の透明釉で薄めるのですが、何回か試し焼きを行ってよいところを見つけてください。まず素焼きに下絵の具鉛筆で線画を描きます。

原画を写す必要があれば作陶した器に合わせた下絵の裏をやわらかい鉛筆で塗り潰し、器に合わせて鉄筆等で転写すると良いです。カーボン紙は油分があるので避けられたほうが良いと思います。その下絵は絵の具を載せるときに動くことがあるので定着させるために定着剤（フィクサチーフ画材屋にあり）を吹き付けるとよいです。次に調整した下絵の具を載せていきます。私の経験では混色も可能なようなので多くの顔料はそろえなくとも良いと思います。あとは透明釉をかけて焼かればよいのです。仕上がりは七宝に似ています。

難しいのは水彩画と違って製作中は絵の調子のチェックができず、焼きあがってみないとわからないということがあります。絵の具の試し焼きサンプルはとても大事だと思います。



今井さん作品

話し手②・・・椎橋勇さん

土の種類ですが信楽と表示しましたがテラコッタです。土の塊からベースになる形を作り、装飾の部分はあとからヘラなどでのばしてパーツ付けしました。

“唐獅子像”

なので力強さだすために後から盛り上げました。

（モデルは日本の屏風などに書かれている獅子です。平面図



椎橋さん作品

しか見られず立体的に表現するのに苦労しました。最終的には猫が威嚇するときに見せる背中に逆毛を立てて尻を持ち上げている姿をヒントにしました。型になった像を3つにスライスして陶管を作る要領でスプーンを使ってかき出しました。（スプーンは微妙なカーブがあつて使いやすいです。）ドベで一对の像に戻し、迫力を出すために、渦巻いた部分や逆毛だった部分の装飾に、紐作りを使用しましたが途中で折れたりし苦労しました。

電気窯で素焼 700 度、本焼 1200 度ほどで焼いています。ブロンズ風及び、雨ざらし風を出すように仕上げたかったので、伊羅保釉をどぶづけで黒天目釉を吹き、灰をふるいました。そのせいで灰が流れ、穴窯で焼いたような雰囲気が出ていると思います。

- 『バラ文様の豆皿』（煉り込み）
- ① 白土と色土を各 500 g 用意する。
 - ② 粘土を各縦 5 × 横 20 × 厚さ 2 cm にする。型紙も縦 5 × 横 20 cm のものを作り、それを 8 等分にする。
 - ③ 両端を除外した残り 6 つに対角線を引く。粘土に型紙と同じ 8 等分の印と対角線の印をつけ、対角線をカッターで切る。

話し手 ③・・・徳植美和恵さん



- ④ 白土と色土を対角線で貼り合わせる。
- ⑤ 印に沿って 8 つに切り分ける。もう 1 つも切り分けてグラデーション粘土の完成。各グラデーション粘土の色の順番を分かりやすくするために表面に番号をつけておく。順番を間違えないよう同じ番号を重ねて置く。
- ⑦ まずはそれぞれを押しつぶして 2 つを重ねる。
- ⑧ さらに 2 つにちぎって重ねて混ぜていく。
- ⑨ 色土(番号要確認)を置き、表面に水を塗り番号順に 1 枚ずつ水を塗りながら粘土を重ねていく。下の色土から徐々に薄い色土になる。
- ⑩ これを 24 cm まで伸ばし 2 等分に切ったものが 2 組出来る。
- ⑪ これを 24 cm にまた伸ばし 2 等分に。(12 cm が 4 つになる)
- ⑫ 4 cm を 2 つ、6 cm を 4 つ、8 cm を 2 つで花びらを作る。
- ⑬ 両端をつぶし、半月状にする。
- ⑭ ⑪ で作った 4 cm の平面に水を塗り、色土を内側にして細く丸めて芯を作る。
- ⑮ ⑫ に水をたっぷりつけて残りの 4 cm を巻き付けて接着する。
- ⑯ 同じ要領でこれに残りの 6 cm を 4 つ、8 cm を 2 つ巻きつける。
- ⑰ 厚さ 5 mm に切り、布で覆い均等に叩き平らにする。

- ⑱ 平らにしたものを、型に置いて小鉢に仕上げる。



徳植さんのバラ文様豆皿

(*) この説明を専修部高橋光男さんが解かりやすいように図にしてくださいました。別紙参照してください。

私の作陶に対する気持

石川美枝子

今回で二回目の作品展出展でした。私は三溪園の横浜市陶芸センターで作陶しております。手びねりから始まり、電動ロクロ、10年足らずの経験です。

センターの中の公募教室、備前焼、染付、上絵付、金彩、穴窯等に参加しております。上絵付は絵柄をいろいろ考え絵付しています。絵の具の色が少なく、色を作りながら工夫しています。焼き上がるまで色がどうなるか不安な反面、楽しみの一つでもあります。



石川さん作品

赤絵は私の好きな色です。青磁は鎌倉彫をやっている友人から彫りの要領を教えてくださいいただき半磁土に作陶しています。穴窯は古信楽の荒めの土で手びねりで自分のオリジナルティを出せるように心掛けています。

今までに自分自身納得した作品は少ないのですが、いろいろ経験を積み創意工夫をしていきながら自分に合った道を追求して行きたいと思えます。

余談ですが、今回は 私の中学卒業（50年前）のクラス会も兼ね、展示場を集まっていたいただきました。全体の出品されたものを見て一様にこれがアマチュアの作品かと感心しておりました。

中華街、山下公園、大棧橋、赤レンガを廻り楽しいひと時を過ごすことが出来ました。入会して日は浅いですが、よき先輩に出合い、またご指導をいただき、これからも前向きにチャレンジしていきたいと思えます。

作品展・特設コーナー

今年度は「陶管」でした。28名の出展がありましたが、難しかったのか昨年と比較少ない参加者でした。



もったいないコーナー・報告

・ ・ ・ 広報部 吉良

作品展会場で山中さんの陶芸道具類を再利用していただくために展示いたしました。展示品は有効活用のため殆んど皆様に引き取られてゆきました。

ご協力有り難う御座いました。

美術館の見学会に参加して

事業部 吉川 勝

2月4日、友の会恒例の美術館見学会で、出光美術館で開催中の「三代山田常山・人間国宝、その陶芸と心」展へ行ってきました。

当日は土曜日であったためか、会員の参加者が18名と少なかつたように思えた。会場は、多彩な急須・煎茶具・茶陶・酒器・食器・登窯でやかれた自然釉のかかった作品など、百八十数点が整然と展示され、常鍋焼きの世界がくりひろげられていた。

三代常山は初代・二代が作った中国風の端正な急須からの教えを受け継ぎながら、日本らしい急須作りへ創作力と探究心でひたすらに作られた急須の数々であった。

胴を四つに区切った瓜形や林檎のへたに似せた蓋のつまみ、注口、握手の付け根にあえて指跡を残し、造形模様として生かされていた。どれをとっても同じものがなく、変化に富んでいて見ごたえのある、そして楽しくなるものばかりで感動した。

私も、これから形にこだわることなく、楽しくなるような物づくりができたならな〜と、思っている。とても有意義な一日であった。

早朝より参加していただいた皆様はいかがだったでしょうか？参加してよかった〜と思っただけであれば企画のお手伝いをした者として幸いです。

作品展に思いをよせて

・黒マット釉振れ滝文花入

石井誠一

ナイヤガラナイヤガラの滝は、アメリカとカナダの国境にある五大湖を水源とした河が滝となって流れ落ち、その水量は半端ではなく、乙女号で、滝の落下地点に近づくと、落下の水は風を起こし水を巻き込み、渦巻きとして吹き付けます。落差はたかだか 50 ～ 60 m ですが、その幅と水量は想像を超えるものでした。写真を撮る余裕もなくただ呆然と見つめるだけでした。



作品は、器を振るることによって風を表現し、風の凄まじさは底を小さくすることによって迫力を出してみました。水量は、4面ともに白化粧を掛けた。黒御影に黒マットを生掛けして荒々しさを出しました。

・瀬戸黒吹上文篇形(なり)花入

世界3大瀑布の一つ、南アフリカのビクトリアの滝をみた印象です。この滝はナイヤガラと違って、水はV字形に大地が割れた底に落ちていくものでした。水源は平原が池塘に

なっていて

その水が集

まり河にな

って滝とな

って落ちる

のですが、

V字形の滝

壺は狭く行き場を失った水は吹き上げ 80 m の上空に舞い上がり、池塘が水源のため夏は滝が消えます。

作品は、黒御影に瀬戸黒で明るく表現し、白化粧は底から流し、そのまま逆さに焼き、吹き上げ状態の滝をイメージしました。



・黒御影翔鶴文立鼓(りゅうこ)形花入

この作品は、日本の復興を願って、制作しました。多くの鶴に願いを込めて、空高く舞い上がってもらい、一日でもはやく安穩の生活が取り戻せるように願っています。立鼓の形にしたのも、末広くという思いからです。



(写真はそれぞれ石井さんの作品です)

役員会だより

・・・総務部 大内

2月25日、今年は梅も1ヶ月遅れと、まだまだ寒い中開催、午前中雨模様の影響もあり人数は18名と少数精鋭(作品展報告、役員人事、アンケート等)、仮決算(総会に向け会計役員はご苦勞様です)

役員をやってもいいヨといってくれた4名が、友の会に新風をと、期待します。

アンケートは今後の指針になるでしょう。

作品展会場で会員以外の人にアンケートをお願いしたらとか忌憚ない意見も出ました。

終わって恒例の二次会へ、楽しい話や、「台湾の故宮に行きたい」「行きたい」と(多数賛同)夢は膨らみ遊ぶ事に関しては盛り上がりやすく意気投合。

そんなこんなで、役員会二次会は無事終了しました。

訃報

寺尾 亮さん

元会計部長、元会計監査

平成23年12月4日 逝去されました。

竹内 武さん

平成24年1月25日 逝去されました。

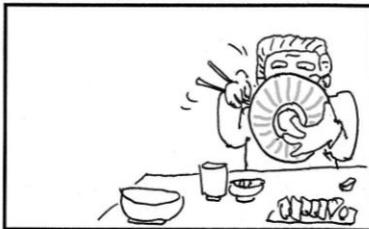
ここに慎んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

陶陶さん

やっと春が
来ましたネ

第 72 号

。。 あかほし



第 13 回 “ぐい呑みと盃” を楽しむ会

今年の“ぐい呑みと盃を楽しむ会”は少し早い時期ではありますが、風薫る爽やかな5月の昼下がりに素材を活かした和食を楽しんでいただこうと思い、下記のとおり企画致しました。(器もなかなか素敵です) 自慢のぐい呑みでゆっくりとお酒と料理を楽しんでみませんか? (自作のぐい呑み、盃をどうぞお持ち下さい。)

狭い場所のため、先着16名とさせていただきます。

(日時) 5月26日(土)

(集合場所) JR「港南台」駅 改札口13時00分

(会費) 4,500円

(申込方法) 友の会名簿をご参照いただき、幹事(大日方)まで葉書にてお申し込みください。

(幹事) 大日方 毅

(申込期限) 5月19日(土)

【陶芸友の会総会のご案内】

日時 平成24年5月12日(土) 午後3時から
場所 杉田地区センター 京急杉田駅プララ3階

(予約申込をしてありますが、確定はしていないそうです。今までの経験からまず大丈夫だそうです。)

駄目になったときは、変更場所を葉書などで通知いたします。

【新入会員】

来馬昌樹さん

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

<http://www20.atpages.jp/tomonokai/>

横浜陶芸友の会だより 第 150 号

(平成 24 年 4 月 1 日 発行)
発行人 横浜陶芸友の会
会長 松崎 紀一

編集責任者 広報部長 吉良謙

編集後記

今号の作品展・作者による作品説明をどのようにお読みになりましたでしょうか。「横浜陶芸友の会便り」を事務連絡だけに終わらせたく無く、会員の交流や情報の交換の場となればと、色いろ試みております。この号の記事を見て投稿などをお寄せいただければ幸いです。

吉良

教文ホールでの作品展開催は来年まで? その先はそのときになってみないとわからない。会員数も減っているし(会費が少なくなる)それでもやれることはあると思う。大家族もいけど小家族も棄てたものではないかと思えます。

小松

小松さんが「作品説明・質問時間」の話し手達のテープ起しをしたり、久々の6頁でそれなりに時間がかかりました。

信岡